

## ビバハウス便り NO.73 新しい10年へ 2011年1月5日

ビバハウス 責任者 安達 俊子

今日1月5日、10時から新年初のスタッフミーティングを開いた。若者たちの冬休み明けは8日だが、それまでに、事前にやっておくべきことに集中するための3日間だ。今日はまず、毎日使う食堂の、まるで10年間の汚れを取り除くような徹底的な大掃除だ。普段は動かさない16人用の大テーブルを移動させて、床拭きをやり、冷蔵庫も移動させて、後ろ側までをきれいにした。食器棚からはすべての食器を出して、1段ずつ丁寧に拭いた。あまり強くこすると、ボードがはげてしまうという声も出るほどの徹底振りだ。そういえば、これらのすべての食器棚、冷蔵庫などは、中古の品を町内の心ある方々から頂いて、今日まで使わせて頂いて来たものであったことを、感謝とともに改めて思い出した。この10年、どんなに多くのひとびとにビバは支えられて来たのだろう！

昨年9月1日で、創設10周年を迎えた記念のイベントを、すべての農作業の済んだ12月4、5日に行うことが出来た。元北星余市高校の教員仲間で、余市高の教育創造に先駆的な教育実践をされた、近藤典彦先生のご協力もいただき、画期的な成果を収めることが出来たと確信している。第一日、北星余市高校の講堂をお借りしての、教育シンポジウム『北星余市高校とビバハウス』は、100人の参加者を得て、1時間にわたる近藤先生の講演を基に、北星高校卒業生、ビバハウス卒業生、北星余市校の教員、一般参加者からも活発な意見が交わされた。現在の日本の教育に求められているものの核心は何か、それは、『人と結びつく力、生きていくための力を育てる教育ではないか？』。まさにそれこそが、北星余市の教育の核心であった筈だし、その原点が今新たにビバハウスで継承発展されているのではないか？などの論議が活発に交わされたのは主催者として望外の喜びであった。

シンポジウムでも発言をされた、北星高校の幅口和夫校長先生も、『近藤先生をお招きして、教師研修会を開きたい』とのご意向もお持ちとお聞きしているので、このシンポジウムが新しい北星余市高校の教育の発展につながり、生徒減で厳しい局面を迎えている同校の存続のために力になってもらえればうれしい限りだ。

シンポジウム終了後、町内鶴亀温泉で行われた、記念式典と、夕食会には、会場に入り切れないほどの85名の方々の参加を頂いた。現在、厚労省の基金訓練合宿所として使用させて頂いている、入舟事務所の土地建物を、650万円で買い取り、寄付して下さった故石田照夫様、奥様のイチ様初め10名の方々へ感謝状を贈らせて頂いた。いずれもこれらの方々のご支援、ご協力がなければ今日のビバがありえない方々ばかりであった。

2日目には近藤先生のご専門の『石川啄木の偉大さ～大逆事件・韓国併合100年に思う～』と題したビバハウス10周年記念行事を、余市町中央公民館で開いた。有料にも拘らず、これにも50名以上の方々が参加して下さいました。資料として、近藤先生の最新の研究『石川啄木の韓国併合批判の歌六首』31枚、関連資料43枚のコピーを皆さんにお配りすることが出来た。余市町における啄木研究の新しい兆しに興ることを祈るや切である。